

大震災からの復興を期待して

留萌医師会 理事
藤田クリニック 院長

藤田 宏之

このたびの大震災で想像を絶する恐怖、被害にあわれた皆様におかれましては、心よりお見舞い申し上げます。またお亡くなりになった方に心よりご冥福申し上げます。いまだに不自由な生活を送られながらも、日々気丈に過ごされている姿をニュースで見るたびに人間性の強さに感心し、復興に期待してこれからも医師会および支援団体、募金運動を通じて支援に協力していきたいと思えます。

3月11日の午後、外来診療中に窓のブラインドがゆっくりと揺れていました。「地震か？」と思う程度の揺れでした。仕事が終わってからのテレビからは現実とは思えない被害の様子と、その広範囲にわたる規模の大きさの示す情報がめまぐるしく飛び込んできました。

震災から2ヵ月近くたち、いまだ様変わりしたがりきだらけの町をみると、被災した人たちの我慢強さも、くじけてしまいそうにならないか心配でなりません。人はまず基本的な生活、健康がなければ次に踏み出す勇気も湧いてきません。地域の復興にはまず、生活できる住居と資金、ライフライン、安心できる医療があってこそでしょう。ありがたいことに日本中、そして世界から支援、義援金が送られています。その援助はこれからも長い間続いてゆくでしょう。国や支援団体はそれを、早く早く早急に目に見える形で使っていただくよう希望しています。そして目に見える復興の姿を早く見たいのです。

今回の災害は、われわれと同じ医療にかかわる人たちにも甚大な被害を与えました。医師会の仲間、そして地域医療を担っていた人たちです。亡くなってしまった方たち、建物も高価な機械も失い診療を断念せざるを得ない先生方がたくさんいらっしゃるのを見ました。先生達がいなければ地域医療が崩壊してしまいます。数人で集まって医療施設を開設するなど、リスクをできるだけ抑えてなんとか持ちこたえてください。頑張り疲れて、もう頑張れとは言われたくないかもしれませんが、ここはもうひと頑張りと言わせてください。留萌医師会一同、心より、心より笑顔が戻る日が来ることを願っています。



東日本大震災に思うこと

羊蹄医師会 会長
くとさん外科胃腸科 院長
皆川 幸範

このたびの東日本大震災で被災された皆様に心よりのお見舞いを申し上げますと同時に、皆様のご無事と被害に遭われた地区の速やかな復興を心よりお祈りいたします。

私は1982(昭和57)年3月21日の浦河沖地震(M7.1、震度6)と、1993(平成5)年7月12日の北海道南西沖地震(M7.8、推定震度6烈震)の2度、たまたま浦河・倶知安におりまして被災された患者さんを治療する機会がありました。

浦河沖地震では津波はありませんでしたが、家屋の倒壊などかなりの被害でした。しかし火災が一件も起こらなかったのは、普段からの地震に対する地域住民および子供への教育・訓練の成果と思われました。当時の浦河赤十字病院は患者で溢れかえり、科を問わずDr・看護師・技師・助手など全員で寝ずの治療にあたりました。

南西沖地震では多くの患者さんは函館に搬送されたのですが、瀬棚・島牧で津波にあった患者さんなど10名ほどは倶知安に搬送されました。ほとんどは倶知安厚生病院に運ばれましたが、私の出張先の医院に3名が搬送され、処置しました。急性期の治療はなんとか順調にいきりましたが、時間がたつにつれて精神的に落ち込む患者さんがおりました。「あの時手を放さなければ、婆ちゃん死ななかつたのに」と悔やんで眠れないと泣いていました。長期にわたる精神的ケアの必要性を感じました。

今回の東日本大震災は、スマトラ大地震の映像が記憶に新しいものの、その比ではない巨大な地震と津波でした。経験など何の役にも立たないのではないかと思われたほどです。病院が壊滅状態で医師も亡くなり、石巻、気仙沼市などの三陸沿岸を中心に主な病院が休診となりました。「医者がいても施設がなければ治療ができず、施設があっても医者がいなければ治療ができない」。被災地の早期医療復興に影響が出ないことを祈るばかりです。

羊蹄山麓では中心となる倶知安厚生病院の医師数が全盛期の半分に減少しており、救急医療の維持にも困難な状況に陥ってきております。被災地への支援とともに地域医療の再生に向け、北海道医師会の一層のご健闘を期待します。